第33回日本乳癌学会学術総会
厳選口演4
評価・サポーティブケア
（HBOC/AYA/高齢者）

子育て中の乳がん患者の養育態度および関連要因

赤川祐子[1)]、井上実穂[2)]、大沢かおり[3)]、丹治史也[1)]
1）秋田大学大学院医学系研究科　看護学講座
2）独立行政法人国立病院機構四国がんセンター
3）国家公務員共済組合連合会東京共済病院

筆頭演者の利益相反状態の開示

すべての項目に該当なし

背景

- 子育て中の母親が乳がんに罹患する場合がある
- 育児や仕事など多重役割との両立が求められ、ストレスや困難を抱えやすい
- 心身のストレスは、育児態度や親子関係に影響を及ぼす可能性がある
  - ➤心理的苦痛が強いほど、しつけがより厳しく一貫性に欠ける傾向がある
  - ➤親子関係が深まる例もある

親の養育態度や親子のコミュニケーションに変化が生じることが予測される

日本では、養育態度やコミュニケーションに影響する要因が明らかになっていない

Akagawa Yet al.: Challenge and hope for parents who have cancer. Int J Sci Res Arch. 2021;3(1):136-147.
Tavares Ret al.: Mothers with breast cancer: a mixed-method systematic review on the impact on the parent-child relationship. Psychooncology. 2018;27(2):367-375.

目的

乳がん患者の母親としての

養育態度および**関連要因**を明らかにする

母親としての役割を支える実践的知見を提供し、

患者と家族のQOL向上に貢献する

方法

調査期間： 2024年10～11月

対象： 18歳未満の子どもを育てる女性乳がん患者（病期不問）200名

方法： 無記名・横断的インターネット調査（全国対象）

倫理的配慮： オンライン同意取得／秋田大学医学部倫理審査承認（3225）

調査項目：背景変数： 年齢、子の人数・年齢、就業状況、サポート有無など

QOL： FACT-B（乳がん特異的QOL尺度・37項目）

養育態度： APQ（アラバマ式養育態度質問紙・42項目）

分析方法：背景要因とQOL・養育態度の関連を重回帰分析で検討

単回帰（$p<0.20$）で選定 → 多変量モデルに投入（VIF<5 多重共線性なし）

統計解析： SPSS ver.28、$p<0.05$を有意とした

結果

- 回答者200名（有効回答率：100%）
- 子どもにがんを伝えている：166名（83.0%）
- 子どもとの関係で困難がある：34名（17.0%）
  ➤理由
  【親役割の制約と葛藤】
  【外見の変化に対する子どもの反応への葛藤】
  【子どもの心配や不安への対応】
  【親子関係の心理的な変化】
  【親子間の触れ合いへの戸惑い】
- QOL（FACT-B）合計：98.0 ± 21.1
- 養育態度（APQ）合計：132.6 ± 16.3

表1：研究参加者の背景　　*N*=200

	人数（%）	Mean(SD)
年齢		**47.5 (5.8)**
就業状況		
有職	138(69.0)	
無職	62(31.0)	
子どもの人数		
1人	74(37.0)	
2人	**88(44.0)**	
3人以上	38(19.0)	
第一子の年齢		**14.5 (5.8)**
日常生活の支援者の有無		
あり	109(54.5)	
なし	91(45.5)	
診断時の病期		
Stage 1	115(57.5)	
Stage 2	60(30.0)	
Stage 3	13(6.5)	
Stage 4	5(2.5)	
不明	7(3.5)	
治療期間		3.8 (3.5)

結果

表2：養育態度に関連する要因　重回帰分析結果　*N*=200

	β	B (95% CI)	p
年齢	-0.007	-0.17 (-0.57, 0.22)	0.389
就業状況			
無職	0.11	4.02 (-0.45, 8.48)	0.077
子どもの人数	0.02	0.49 (-3.18, 4.16)	0.793
第一子の年齢	-0.22	-0.63 (-1.21, -0.05)	0.033*
日常生活の支援者の有無			
なし	-0.05	-1.53 (-5.67, 2.61)	0.467
子どもとの関係			
困難なし	0.09	3.96 (-1.84, 9.76)	0.180
QOL（FACT-B）合計得点	0.40	0.31 (0.21, 0.42)	<0.001*

子どもの年齢が高いほど養育態度が低く、
QOLが高いほど養育態度が肯定的

考察

子の年齢と養育態度：年齢が高い子どもをもつ親ほど、養育態度スコアが低い

発達段階に応じて親の関わり方が変化

➤幼児期：密接な関与

➤思春期：自立支援型へ移行

病気理解や心理的距離が広がりやすく、親の関与が難しくなる傾向

QOLと養育態度の関係：QOLが高い親ほど、肯定的な養育態度を示す

➤身体・精神的安定が子どもとの良好な関係性を支える

➤ QOL低下は育児意欲や対話を阻害し、信頼関係に影響

Kim KH, Kim MS, Choi S, Kim SM, Park SM. Health behaviors and psychological burden of adolescents after parental cancer diagnosis. Sci Rep. 2022;12(1):Article 102505.
Oshiro R, Kamibeppu K. Difficulties faced by adolescent children of mothers with breast cancer: An analysis of free description of questionnaire survey. JJRNF. 2023;29:27-36

考察

多面的支援（身体・精神・社会）でQOLを向上

➤家庭支援制度（例：訪問型保育、費用補助）の整備が課題

➤年齢別の育児支援（幼児／学童／思春期）が必要

➤医療・地域・学校が連携した包括的な体制づくりを提案

研究の限界

- 横断研究のため、要因と養育態度の因果関係は不明

  ➤時間経過・治療過程による変化把握には縦断研究が必要

- ホルモン療法や化学閉経等の変数を十分に調整していない

  ➤心理状態・養育態度への残余交絡の可能性

結論

・乳がん患者の育児態度と関連する要因について、
子どもの年齢が高いほど養育態度は低く、QOLが高いほど育児態度は肯定的であった

・今後はQOLの維持・向上を支援し、育児環境を整えるため医療機関、地域社会、職場、学校が連携した包括的な支援体制の構築が必要である